

## ニーチェの名著構想、一八八六年夏から一八八八年冬

菅野孝彦

ニーチェの著作とされる『力への意志』をめぐっては、この書を彼の名著と認めるか否かの点で異なった対応がなされてきた。『力への意志』をニーチェの後期思想における名著と位置づけるのは、ニーチェの妹のエリザベトやニーチェの助手をとめていたベーター・ガストラ、グロースオクターフ版編集者の立場であり、他方、『力への意志』所収の各断片を草稿状態に戻し利用すべきだと主張するのが、歴史的批判全集の立場である。グロイター版である。たしかに、ニーチェは、『力への意志』執筆を企図していたと思わせるさまざまな計画草案を残している。しかし、それがはたしてグロースオクターフ版『力への意志』を意味していたかどうかは、疑問の余地が残るところである。むしろ、残された計画草案を吟味し、ニーチェ自身の企図を明らかにすることが急務と思われる。

ニーチェが『力への意志』刊行の計画を公にしたのは、『善悪の彼岸』の表紙カヴァーにおいてが初めてであり、その後は『道德の系譜』の第三論文「禁欲主義的理想は何を意味するか」第二七節において、準備中の著作として紹介しているだけ

である。したがって、さしあたりこの『道德の系譜』が出版された一八八七年十一月の時点においてまでは、ニーチェ自身『力への意志』公刊の意図をもっていたことが、明白な事実となる。そこで、これまでの試みに引き続き<sup>(1)</sup>、本稿では、『善悪の彼岸』の刊行（一八八六年八月）以降、『道德の系譜』出版をへ、一八八八年初頭までの『力への意志』に関する構想について言及する<sup>(2)</sup>。

### 一 『善悪の彼岸』刊行以後におけるニーチェの 名著構想の変遷

まず、「シルス・マリア 一八八六年夏」と記述された断片において示される『力への意志』の構想である。これまでの構想に比べ、格段に明確になっている。断片21100(Ⅲ)（表記は、グロイター版による。この断片は、グロイター版第八部第二群第百断片となる。）である。

「力への意志

あらゆる価値の価値転換の試み

全四巻

第一巻 危険の中の危険（ニヒリズムの叙述）（これまで

の価値評価の必然としてのニヒリズム）

第二巻 諸価値の（論理学等）批判

第三巻 立法者の問題（孤独の歴史も含めて）。

反対の価値評価を行なう人間はどのようなでなければならぬか。近代的魂の一切の特性を帯びながらも、それらをまったくの健康へと転換し得るだけの強さをもった人間。

第四巻 鉄槌

彼らの課題のための手段

シルス・マリア 一八八六年夏

この部分は、グロースオクターフ版でもニーチェの『力への意志』構想の一つとして取り上げられている。しかし、グロイター版にみられる草稿断片と比べると、明らかに、そこには多くの「移動」個所が指摘される。第一に、第三巻の説明部分にあたる「反対の価値評価を行なう人間はどのようなでなければならぬか。近代的魂の一切の特性を帯びながらも、それらをまったくの健康へと転換し得るだけの強さをもった人間。」が、第四巻の説明部分に移動されている。さらに、本来、[100] [III]では、この後に以下の部分も続いているが、グロースオクターフ版にはさまざまな異同をともなって用いられている。

「巨大な力が解放されている。しかし、それらの力は相互に対立しあっている。解放された諸力は、互いに潰しあっている。解放された諸力を新たに規制して、それらが互いに潰しあうことのないように、そして本当の意味での力の増大に目を開くようにさせること。理想とその個々の条件の間にある不調和をいたるところで提示すること（例えば、キリスト教における誠実さ。それは、絶えず嘘へと変わらざるを得ない）。

第二部について

誰もが専門家になる民主主義的共同体にあつては、へ何のために（誰のために）が欠如している。一人一人が、何千分の一にも矮小化して（機能と化して）、意味を獲得するといった状態。

官能

残虐

復讐

愚鈍

物欲

支配欲等が発展して

これまでのすべての理想に潜む危険

インド及び中国の思考様式の批判、同じくキリスト教の思考様式の（ニヒリズム的の準備として）

危険の中の危険。すべてに意味がない。

鉄槌。死への憧れにとりつかれたペシミズムの跳梁によって、生きる力を最も強くもつ人々を選ぶ。」

しかし、グロスオクターフ版では、第四巻以外の説明部分に「一八八六年夏の計画草案」としては削除されてしまった部分から引用し、いわば各巻に新たな意味づけを行っている。第一巻の説明部分には、「一八八六年夏の計画草案」から削除された部分「巨大な力が解放されている。しかし、それらの力は相互に対立しあっている。解放された諸力は、互いに潰しあっている。」及び、「誰もが専門家になる民主主義的共同体にあつては、へ何のために〜誰のために〜が欠如している。一人一人が、何千分の一にも矮小化して（機能と化して）、意味を獲得するといった状態。」を用いている。第二巻の説明部分には、「理想とその個々の条件の間にある不調和をいたるところで提示すること（例えば、キリスト教における誠実さ。それは、絶えず嘘へと変わらざるを得ない）。」を、そして第三巻の説明部分には、「解放された諸力を新たに規制して、それらが互いに潰しあうことのないように、そして本当の意味での力の増大に目を開くようにさせること。」を用いている。明らかに、こうした「移動」はこの断片本来の形を損なうものである。なお、この「100」(III)の末尾「鉄槌。死への憧れにとりつかれたペシミズムの跳梁によって、生きる力を最も強くもつ人々を選ぶ。」は、単独でグロスオクターフ版「力への意志」第九〇五断片となつている。したがって、グロスオクターフ版では、この「100」(III)の残りの部分、すなわちグロスオクターフ版がいうところの「一八八六年夏の計画草案」及び「力への意志」第九〇五断片の構成にあづかることのないなかつた箇所は削除されてし

まつている。

また、ジョルジイ・コリイとともに、グロイター版の編者であるマツツイノ・モンテイナリイは、「シルス・マリア 一八八六年夏」構想にみられる、これら四巻の主題をそれぞれ「ニヒリズム」「価値批判」「力への意志の意味における価値転換」「永遠回帰」とみなしているが、次の断片「108」(III)は、モンテイナリイのこの視点をたしかに裏付けるものである。<sup>3)</sup>

「11 あらゆる徴候からみてニヒリズムはすぐそこまで来ている。

II その諸前提を把握しない限り不可避である。諸前提とは、価値評価のことである

(ある特定の解釈を通じて初めてペシステイックにもオプテイミステイックにも作用するような社会的事実ではない)

2 III 価値評価の成立、その価値評価への批判として。

3 IV 回心した者。その心理学。

4 V 鉄槌。決定を引き出す教説として。

1 危険の中の危険

2 道徳の批判

3 我ら回心した者

4 鉄槌」

ローマ数字とアラビア数字の対応を考えるならば、モンテイナリイの言う主題で各巻を捉えることができるであろう。「回心した者」とは、既成の価値から解き放たれた、新しい価値定立

者の謂いである。さらに、「鉄槌」と永遠回帰との関連については、745(Ⅲ)から明らかになる。

「1 価値批判。生の物差しで測って。」

2 諸価値の由来

3 力への意志としての生

4 逆転した者 彼らの鉄槌へ回帰の教え<sup>①</sup>」

「鉄槌」とは、「回帰の教え」であり、永遠回帰思想を意味している。しかし、「あらゆる価値の価値転換の試み」という副題を保持しつつも、こうした四巻構成とは少し異なる575(Ⅲ)のような「力への意志」構想もみられる。

「力への意志

あらゆる価値の価値転換の試み

1 真理の価値について

2 その帰結

3 ヨーロッパのニヒリズムの歴史

4 永遠回帰<sup>②</sup>」

各巻の順番が変わっている点と、価値批判の対象が「真理」となった点に特徴がある<sup>③</sup>。この断片も含めてこれまでの構想において各巻の表題として掲げられている「価値」は、まだ個別的な価値（論理学、道徳、真理）の形式であったが、それが価値一般に対して定式化されると、「最高価値の批判」という形式をとる。そして、そうした断片の一つがグロースオクターフ版『力への意志』の編集方針となった断片764(Ⅲ)である。

「あらゆる価値の「価値転換の試み」

第一書 ヨーロッパのニヒリズム

第二書 最高の諸価値の批判

第三書 新しい価値定立の原理

第四書 訓育と育成

一八八七年三月十七日、ニースにて<sup>④</sup>」

この断片は、「」部分を欠いているが、「一八八七年三月十七日」という日付の点から考えても、また575(Ⅲ)に見られるようなニーチェの用語法例からみても、グロースオクターフ版『力への意志』の編集者が依拠した断片にはかならないと思われる。なお、この断片も、異同をともなつてグロースオクターフ版編者是用いている。グロイター版草稿断片においては、「1 純粹に道徳的な（例えば仏教のような）価値定立は、すべてニヒリズムに終わる。これはヨーロッパにおいて予期されることである。宗教的背景抜きに道徳主義によつて事態を切り抜かれると、人々は信じているが、それによつてニヒリズムへの道が避けられないものとなる。宗教のうちには、われわれ自身を価値定立者とみなすだけの衝動力が欠如している。」

という一文が続き、この部分は「力への意志」において第十九断片として収録されている。この構想575(Ⅲ)の特徴は、さきに述べたように、第二書において個別的な価値の批判ではなく、「最高の諸価値」一般の批判が企図されている点、次に第二に、第四書が「永遠回帰」ではなく、「訓育と育成」という表題に変えられている点である<sup>⑤</sup>。

## 二 『道徳の系譜』刊行以後におけるニーチェの 主著構想の変遷

ニーチェは、『力への意志』をめぐるこの構想を著した四ヶ月後、一八八七年の七月三十日『道徳の系譜』を脱稿し、九月には最終校正を終了する。その後、九月十九日にシルス・マリアからガストのいるヴェネチアに滞在し、十二月二日にニースに到着した。この時期の断片群には、第五群及び第八群から第十群があたっているが、これらの断片群においても『力への意志』の四部構成の構想が続く。91[64]④では、以下のように構想されている。

### 「力への意志

あらゆる価値の価値転換の試み

第一書 従来のも最高価値のもたらす帰結としてのニヒリズム

第二書 従来のも最高価値の批判

それらの価値を通して「然り」と「否」を言っているのは何か、ということへの洞察

第三書 ニヒリズムの自己克服、これまで否定されてきた

一切のものに「然り」を言う試み

第四書 克服する者と克服される者。一つの予言。」

また、表題を与えられてはいないが、10[58]④にも『力への意志』の構想がみられる。

「第一書の内容 さまざまな理想的価値の帰結としてのニ

ヒリズム

文明の問題 十九世紀、その両義性。今までは道徳からの自由がなかった。

ペシミストは、道徳的パトスをもった反乱者にほかならない。

ペシミズムの原因としての道徳 ニヒリズムの前形態としてのペシミズム

第二書の内容 道徳の歴史

いかにして美徳は、支配権を獲得するに至るか。哲学者の魔女としての道徳

第三書の内容 真理の問題。

第四書の内容 われわれの世界から神を剥奪した後の、高級類型の歴史

一つの裂け目を破り、広げるための手段。例えば、位階。

最も世界肯定的な教説の掲げる理想 悲劇

的時代。

神という理想にみられる心理学的素材さ

このように『善悪の彼岸』『道徳の系譜』といった著作の公刊と並行するかたちで、ニーチェは自らの主著となる書（必ずしも、グロスオクターフ版『力への意志』の内容をもつものではないが、はからずもニーチェが『力への意志』と呼称する書）について絶えず構想し続けるのである。さて、これらの断片では、これまでの『力への意志』の構想の特徴である「四部構成」という観点は依然として保持されている。しかし、四部

に分かつその内容の点で相違を示している。すなわち、これまでの構成は、「ニヒリズム」「価値批判」「価値転換」「永遠回帰」の四点であったが、上記①②③(Ⅲ)及び④⑤(Ⅳ)では「永遠回帰」の項が欠けている。とはいえ、ヨーロッパのニヒリズムの歴史に言及した「ヨーロッパのニヒリズム レンツァーハイデ 一八八七年六月十日」の表題をもつ⑥(Ⅴ)において⑥、「最も強き者は永遠回帰をどのように考えるのか」と結んでいるように、ニーチェにとって「永遠回帰」の問題はけっして放棄されたわけではない。むしろ、相変わらず彼の中心問題の一つを形成しているといえよう。

『道徳の系譜』刊行直後のニーチェの気分は、あまりすぐれたものではなかった。彼は、ガストに宛てた一八八七年十二月二十日の書簡に次のように書いている。

「今は一心に仕事に励んでいます。しかし憂鬱な気分です。というのも、この数年間つきものだったあの激しい躍動感がまだともなっていない。いまだに人間の域を脱していないのです。それでも、何が為され、何が片付けられたのか、私にはわかっていません。私のこれまでの生存の下部に、一線が画されたわけです。それがこの数年間の意味だったのです。もちろん、まさにそれによって、これまでの生存が何であったのか、実態が明らかになったのです。それはたんなる一つの約束でしかありませんでした。この最新作『道徳の系譜』からほとぼしる情熱には何か戦慄すべきものが込められています。一昨日、私はそれを深い驚嘆の念をもって、何か新しい

ものにおれるかのように読みました⑦。」

しかし、その同じ日にはカール・フォン・ゲルズドルフに、再び自己の主要問題に挑もうとする決意をも披露している。

「重要な意味で私の生活は、今まさしく完全な正午の時にあるようです。一方の扉は閉じられ、他方の扉は開かれる。ほんのこの数年間に私がやってきたことは、過去の清算、その決算、その合算だったのであり、結局、私は人間や事物を片付け、それらにきっぱり始末をつけたのです。私の生存の本来的主要問題に移っていかなければならない今となって、誰がそして何が私のために残ることになるのでしょうか。それが、今大事な問題となっています⑧。」

この時期に対応する断片群は、第十一群以降、ニーチェが狂気に陥る一八八九年一月までのすべての断片群（第二五群まで）となるのであるが、初めに一八八八年二月から三月までの『力への意志』構想についてふれてみたい。というのも、そこにはニーチェ自身の『力への意志』の構想があり、かつまたそれに基づいての諸断片の分類が示されているからである。

第十一群以降の断片群の中で、第十一断片群と第十二断片群には、「力への意志」を主題とする断片をみることができない⑨。しかし、われわれは第十二群にとくに注目しなければならぬと思う。なぜならば、そこにはニーチェ自身が他の断片の分類を指示した断片と、著作の構想を記した断片がみられるからである。第十二群に属しているのは二つの断片に過ぎないが、⑩⑪(Ⅵ)に記された構想に基づいて⑫⑬(Ⅶ)が他の断片を振り分けて

いるゆえに、主著をめぐるニーチェの具体的な構想を知るうえで第十二群断片の重要さはいくらでもないであろう。1212(III)に記された構想は次のようである。たしかに、この断片には『力への意志』を示す明確な表題は記載されていないが、四部構成であること、またその各部の内容からしてもそこに示されているのがニーチェ自身による『力への意志』の構想であることは疑い得ない<sup>(10)</sup>。本来、十二の項目が順不同で記されているが、ここでは各書に整理してとりあげる。

「第一書 1 完全に最後まで考え抜かれたニヒリズム

2 文化、文明、「近代人」の両義性

第二書 3 理想の由来

4 キリスト教的理想の批判

5 いかにして徳は勝利するか

6 畜群本能

第三書 7 「力への意志」

8 哲学者の魔女としての道徳

9 「力への意志」の心理学

第四書 10 「永遠回帰」

11 大政治

12 われわれの生の処方」

この構想に基づいて、1212(III)にある三七二の番号づけられた項目(正確には、四六番と七一番が二度現われているので、三七四項目)が、四書に振り分けられている。しかしながら、これら三七四の番号づけられた分類が上記の編集者によって

は、正確に用いられていないことは、われわれの注目すべき事柄である。この第十二群の、ニーチェ自身による構想及び断片分類の試みは、モンティナリイも述べているように、ニーチェが非常に集中的に『力への意志』に従事し、その頂点に達した営みなのである<sup>(11)</sup>。それは、以下のニーチェの書簡からも明確に裏付けられるであろう。一八八八年二月一日ガストに宛てている。

「今の私のような極限状況の中で生きることが、何と啓発に富んだことでしょうか。今初めて歴史というのがわかってきました。この数カ月間以上に深い洞察を得たことはかつてなかったことです<sup>(12)</sup>。」

また、同じくガストに二月十三日に次のように書きしるしている。

「私はへ価値転換の試みへの最初の執筆を終えました。それは一口にいえば、拷問に近いものでした。続けていくだけの気力も今はつきてしまいました。十年後には、もっとましになるでしょう<sup>(13)</sup>。」

この二月十三日付けの書簡でニーチェが語っている「価値転換の試み」の最初の執筆、それこそが第十二群における構想と分類であるといえよう<sup>(14)</sup>。また、そこには彼の精神的疲労と不満足感が吐露されているのも事実である。それゆえ、これ以降もニーチェ自身の手になる『力への意志』のさまざまな構想が提示されるのである。モンティナリイは、それらの提示においてこそ、ニーチェ自身の手になる主著『力への意志』構想上の

新たな転換がみられることを指摘する<sup>(15)</sup>。それら新たな構想の解明を、グロースオクターフ版『力への意志』の編者と異なる、ニーチェ自身の構想を探るための次なる課題としたい。

## 註

本稿で用いるニーチェのテキストは、Nietzsche Werke Kritische Gesamtausgabe, hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin 1967ff.による。引用箇所は、AbteilungとBandをそれぞれローマ数字とアラビア数字で表し、その後に頁数を示す。なお引用文中の強調文字は、原文におけるゲシュペルトの部分を示している。「―」は、引用者の補足である。

(1) 『善悪の彼岸』刊行までのニーチェにおける主著構想の変遷については、拙論「『力への意志』をめぐる構想の変遷について」所収『倫理学』第十一号筑波大学倫理学研究会一九九四年参照。

(2) もちろん、ニーチェは『力への意志』以外の著作構想についても語っている。先に「十冊の新しい著作の表題」の断片でふれた、『善悪の彼岸』やそこには記されていないなかった『道德の系譜』の構想も示されている。例えば、26139f(Ⅳ)では、

「善悪の彼岸

道德的現象を道德圏外から考察する試み

1 道德的現象のその根源への還元

2 道德的価値への批判  
3 道德の実践的克服」

2553f(Ⅳ)では、

「善悪の彼岸

未来の哲学の序曲

序文

第一巻 哲学者の先人見

第二巻 道德心理学の示唆

第三巻 我らヨーロッパ人 自己照射の機会」

319f(Ⅳ)では、

「善悪の彼岸

未来の哲学の序曲 第一書道德と認識 第二書道德

と宗教 第三書道德と芸術 第四書われわれの徳 第五

書位階秩序について」といった構想が記されている。『道

徳の系譜』についても、その例をあげることができる。

5140f(Ⅳ)では以下のように著している。

「道德の系譜

第一論文 フリードリッヒ・ニーチェ著 2 禁欲的

理想 3 責任 4 へ私とへ彼」

5174f(Ⅳ)にも構想を記している。

「道德の系譜 一つの論争

フリードリッヒ・ニーチェ著

無頓着に、嘲笑しながら、暴力的に―知恵は、われわれがこのようであることを望む。知恵は女であり、常に戦



士だけを愛す

『ツアラトウストフ』ライプチヒ、C.G.:ナウマン出版]

(2) Monnari, Nietzsches Nachlass von 1885 bis 1888 oder

Textkritik und Wille zur Macht, in "Nietzsche" heft. v. Joerg

Salgarada, Darmstadt 1980, S.333.

(4) この575(Ⅳ)に「真理」の表題が現われるが、この時期のニーチェの問題意識を一八八七年一月二二日のガスト宛の書簡が裏付けている。「今は冷酷さわる理性批判のうち興じながら、それによって疲れを癒しています。……そのとき、従来の哲学のすべてのへ因果説」に対する総攻撃が開始され、いやそれ以上に容易ならぬ事態も生じてくるのです。」

(5) モンティナリイは、この断片も「一八八六年夏」[211001(Ⅳ)]と区別できないと指摘している。彼は、211001(Ⅳ)で述べられている「第四巻 鉄槌 彼らの課題のための手段」を764(Ⅳ)の「訓育と育成」と同一であるとみなしている。

ところで、『力への意志』の構想ではないが、その構想の変遷をたどるうえでふれなければならないのは、断片51501(Ⅳ)の存在である。ニーチェは、この断片において五三の断片の整理を行なっている。ここでは、五三項目の表題及び要約が記されている。この項目番号に対応する番号が、他の断片に付されている。しかし、その付された番号は、五三項目中二六断片が見出されるに過ぎな

い。また諸断片の整理を意図して記されたのであるが、どのような具体的な「力への意志」の構想と結びつくかは明らかではない。とはいえ、この断片は、たとえそれが『力への意志』ではないとしても、何らかの著作のために断片群を整理しようとしていたことを明らかにするものとして重要である。なお、この51501(Ⅳ)の第十項目「偉大な人間にあつては、生に独自の諸特性、すなわち不正、虚偽、搾取が最も強く働いている。それらの特性の働きが驚嘆を呼ぶほどであるために、彼らの本質が誤解されて、善の方向に解釈されてしまう。カーライルのタイプの解釈者にみられる。」を、グロースオクターフ版『力への意志』は第九六八断片として所収している。

モンティナリイは、この51501(Ⅳ)について「ニーチェは、以前の材料について記憶から失われようとしているものを、彼が一八八七年春に構想した五三の見出しに書きつけた。それらの見出しは、計画でも草稿でもない。ただ単に、場合によっては使用可能な備忘録の表である。」と述べているaaOS334。諸断片を何らかの著作のために整理することを目的として記された断片の例として、他に1211(Ⅳ)を取り上げることができる。そして、この断片はニーチェ自身の『力への意志』の構想を考えるうえで、きわめて注目すべき価値をもっている。なぜならば、これに続く1212(Ⅳ)において1211(Ⅳ)に対応する構想も記されているからである。

(6) 断片S171(書)は、グロースオクターフ版『力への意志』において、断片四、断片五、断片五五、断片一一四と四分割されている。

(7) Friedrich Nietzsche Sämtliche Briefe Kritische Studienausgabe (以下、KSBと略記) Bd.8 S.213. こうした憂鬱な気分のもとでニーチェは、自らの孤独について一八八七年十一月十二日オーヴァベック宛の書簡において述べている。

「いわば私にとって、一つの時代が終わったように思われます。回顧がこれまでにないほどふさわしいものになりました。十年間の、いや十年以上にわたる病氣、しかもそれは医者や薬で事足りるような病氣ではありませんでした。何が私を病氣にしたのか、何が私を何年もの間死の近くに引きとどめ、いつそ死んでしまったほうがいいという押えがたい思いに駆り立てていたのか、誰が知るのでありましょうか。リヒャルト・ヴァーグナーを除けば、誰一人これまで私をへ理解するへために、ほんの少しの苦衷なり苦惱なりを込めて迎えてくれた者はありませんでした。このように私はすでに子供の時から孤独だったのであり、四十四才の今日でも依然そうなのです。この十年は、独居、孤独が何を意味するのか、十分に知ることができました。……私には、この種の思ひ出を他のすべてのことと同様、折りにふれて笑い草にするだけのへ悦ばしき知識 (esprit gaihard) があります。さらに、自分のことで顧慮を許さぬ一つの使命を持っている

る(使命とでも、運命とでも、どう呼ばれようとする自由ですが)。私を病氣にしたのはこの使命なのです。しかしそれは、私を再び健康にすることでしよう。再び健康にするだけでなく、再び人間を愛する者にするのでしよう。」

(8) KSB Bd.8 S.214.

(9) たしかに、断片1241G(書)には

「諸価値の価値転換 第一書アンチキリスト 第二書哲学嫌い 第三書非道德者 第四書 デイオニユス あらゆる価値の価値転換」といった構想もみられるのであるが、これは一八八八年夏にニーチェによつて新たに挿入されたものである。

(10) モンティナリイは、1221(書)について「その計画は、四書に区分されているが、四書の表題を欠いている。

……この計画で注目すべきことは、再び 四つの主題への動き—ニヒリズム、価値批判、価値転換、永遠回帰—が保持されている、という事実である。……計画にみられる四書は、グロースオクターフ版『力への意志』編集者によつて選ばれた一八八七年三月十七日の計画に正確に対応してゐる。」と語つてゐる a.a.O.S.336f.

(11) Montinari, a. a. O. S. 336.

(12) KSB Bd.8 S.239f.

(13) KSB Bd.8 S.252.

(14) しかし、このような緊張した仕事にあけられること

は、一方ではニーチェの精神に多大の負担を強いていた。ニーチェは、オーヴァベックにそのことを書いていた（一八八八年二月三日）。「今私の直面している、疑うべくもなく恐ろしい使命の輪郭が、いよいよはつきりと霧の中から浮かび上がってきました。……その間、昼も夜ももはやいかに生きるべきかを知らず、かつて味わったこともない絶望の闇に襲われました。しかも、後戻りも右へも左へも逃れるすべのないことがわかりました。選択の余地はないということです。今私を支えているのはこの論理だけなのです。他のいかなる側面からみても、私の状態は耐えがたいものであり、拷問にも近い責め苦でした。私の最近作『道徳の系譜』には、そうした一端がうかがえると思います。つまり、ちぎれそうなくらい張りつめられた弓の状態にあつては、どんな情動でもそれが激しい情動でさえあれば、快いというわけです。」[KSB Bd.8 S.242.]

(15) Montinari, a. o. s. 339. モンティナリは、とくに二つの日付に注目する。一つは、「ニース 一八八八年三月二五日」の日付が入った第十四群であり、他の一つは「シルス・マリーア 一八八八年八月の最後の日曜日」と日付の入った1817(四)である。